

モンゴル語スヌト方言に見られる弱化母音

——音響音声学的研究——

シリngoワ

On Weakened Vowels in Mongolian Su'nid Dialect

— from the viewpoint of acoustic phonetics —

XILINGAOWA

Weakened vowels are commonly seen in Mongolian languages, but their property is different in each dialect. The first objective of this paper is to clarify the real nature of such weakened vowels, focusing on the Su'nid dialect, which is the author's native language.

In addition, the author is also conducting research on phonetic accent patterns of the Mongolian language's Sn'nid dialect, but many counter-examples against the traditional "first syllable stress theory" have been found. Nonetheless, why do Mongolian language studies strongly support the first syllable stress theory. So the second objective is to explain the relationship between weakened vowels and the first syllable stress theory.

To achieve these two objectives, we conducted some experiments using as test subjects, three speakers whose native language is the Su'nid dialect. We applied the acoustic phonetic method to these experiments. In conclusion, weakness is noticeable in open syllables. If the short vowel of a non-head syllable is a closed syllable, and further pitch is added, the vowel becomes a "medium strong vowel" and weakening does not occur.

Regarding the relationship between weakened vowels and the first syllable stress theory, I think that it was because there was a merit that a clear explanation could theoretically be established by giving the principle that the first syllable holds all authority.

1. 研究目的

モンゴル系の諸言語には、共通して弱化母音が見られる。弱化母音というのは、語の第1音節に立つ母音に比べて、第2音節以下の母音が曖昧化されるということで、たとえば、/arab/ (10) という2音節語の場合、第1音節の/aは音声学的には [a] として明瞭に調音されるけれど、第2音節の/aは音声学的には曖昧化して、[ɐ] のように調音されるというような現象を意味する。

このような現象は、単に上に述べた現代モンゴル語だけに観察されるものではなく古典モンゴル語¹でも広く知られており、特に歴史言語学的観点からは音韻変化の主要因のひとつとして、古くから注目されてきた。たとえば、

bagas'a>bag@s'@>bags' (先生)

aGula>aul@>uul (山)

χara>χar@>χar (黒)

(ただし、@=弱化母音、s'=歯茎硬口蓋音、G=口蓋垂有声摩擦音、χ=口蓋垂無声摩擦音、をそれぞれ示す)

のように、もともとは明瞭に調音されていた第2音節以下の短母音が、時代と共に弱化して、こんにちでは多くの場合に消滅しているのである。

ただし、その曖昧化の度合いや消滅の時期、音質などには、微細に見ると方言ごとで異なる特徴があり、決して一様ではない。そこで、本稿においては、筆者の母語であるスヌト方言を中心に、このような弱化母音の実態について明らかにすることを第1の目的とする。

¹ ここでいう現代モンゴル語および古典モンゴル語は、いずれもハルハ方言を代表とする中央語のことである。なお、以下に示す用例についても同様である。

また、これとは別に、筆者は同じくモンゴル語スヌト方言の音声学的アクセントに関する研究をおこなっているところだが、まだ全体の3分の1程度しか解析が終わっていないにもかかわらず、伝統的になかば定説のように言われてきた「モンゴル語のアクセントは、常に語の第1音節におかれる強さ(stress)アクセントである」という指摘に対する反例が数多く見つかっている。

そこで、なぜこのような反例が多く見つかっているにもかかわらず、モンゴル語学においては相変わらず伝統的な「第1音節stress説」が強く支持されているのか、その理由が知りたいと思った。本稿で取り組んだ弱化母音の問題は、まさにそのような脈絡の中で問題として捉え、あわせて弱化母音と第1音節stress説との関連性を説明することを第2の目的とする。

2. 先行研究

2.1. ハルハ方言の弱化母音

モンゴル国の標準語としての地位を保っているのが、首都ウランバートルを中心に用いられているハルハ方言である。したがって、古くからモンゴル語に関する言語研究では、圧倒的にハルハ方言を対象としたものが多かった。しかしながら、実験音声学的方法を用いたハルハ方言の弱化母音に関する研究となると、先行研究の数は激減し、現在までのところ城生佰太郎(2005:59-99)以外には見当たらない。ただし、筆者の目的とは異なる立場からの研究ならば、少数ではあるが存在する²。一例を挙げると、歴史言語学的観点からの栗林(1988)では、モンゴル語の弱化母音が生ずる条件として、先行する子音の成節的な性質によるもの

² たとえば、正書法を主眼とした角道(1974)、音韻論的観点からの齊藤(1984)などである。

と考えられている。そして以下のように述べている。

開音節の弱化母音の消失も、音節構造の再編も、実は「弱化母音を含む音節の閉音節化」に向かう変化である。換言すれば、モンゴル語の弱化母音が開音節で一様に音節主音の機能を失い、閉音節の音節主音としてのみ安定するようになった一連の過程にほかならない。Cを子音、əを弱母音とすれば、現代モンゴル語ではCəの型の音節が消えて、弱母音はCəCもしくはCəCCという型の音節でのみ安定している。

ところで、城生 (*ibid.*) でさえも、実は母音調和が研究の中心テーマであったため、弱化母音に関しては関連事項として扱われているに過ぎず、これに特化した研究というわけではない。しかし、かなり信頼できる実験結果が示されているので、以下に研究成果の一部を述べる。

城生は、ハルハ方言を母語とするいずれも壮年層に属する被験者3名を用いて、延べ206語について、(1) 単語レベル、(2) 文およびディスコースのレベル、に分けて強母音 (モンゴル語学では *changga egs'ig*) と弱母音 (モンゴル語学では *sul egs'ig*) との違いを検討したところ、弱母音の特徴は (1) より (2) のほうで幾分顕著な違いが見られたと報告している。なお、以下に同書のp.86から研究成果の一部を引用しておく。

これに対して、ディスコース・レベルの被験者Bでは、特にF2において母音間の格差が減少し、すべての母音で強母音と比較して顕著な数値の上昇が見られた。このことは、調音音声学的側面では舌位置における前進化を示唆することになるので、いわゆる中舌化が行なわれていると結論づけることができる。ただし、相対的なフォルマント

周波数値の順位は、/e/ > /a/ > /ö/ > /o/ となって単語レベルの被験者 A と変わらない。

一方、F1 に関しては /ö/ と /o/ にやや目立った数値の下降が見られた。このことは、調音音声学の側面では開口度クラスにおける狭母音化を示唆することになるので、先に指摘した舌位置における前進化と併せて考察すれば、ディスコース・レベルでの弱化母音は強母音に比して総じていわゆる「中央化」が顕著に確認されたということになる。

2.2. オラダ方言の弱化母音

オラダ方言は、内モンゴル自治区のバヤンノール市オラダ3旗およびその周辺に居住しているモンゴル人の言語である。レントヤ (2006:88-98) は、このオラダ方言を自らの母語とするところから、音響音声学的方法を用いてこの方言を解析した。

まず、同論文の冒頭にある「緒言」の部分でレントヤが、モンゴル系の諸方言を比較対照すると弱化母音の様子は決して一様ではなく、多様性を帯びていることが明らかにされていると力説しているが、このことは筆者もすでに1で指摘したとおりであり、モンゴル系諸語の弱化母音を検討する際には重要な視点である。また、だからこそ、本稿においてスウト方言における弱化母音を綿密に検討する必要がある。

レントヤは、ケース・スタディーとして選んだオラダ方言話者1名を用いて36語について検討している。なお、被験者の年齢は壮年層に属し、性別は男性である。この結果、やはり第2音節以下の弱化母音には「中央化」が見られたと報告している。この点では、ハルハ方言を扱った城生 佰太郎 (2005) の見解と一致している。ただし、城生 (*ibid.*) と異なる点は、

- (1) 母音音素の数がハルハの7に対して9種あり、2種類多い
- (2) 弱化の程度差が2音節目と3音節目以下で異なっており、3音節目以下ではほとんど音色差がなくなっている

という2点である。レントヤ (2006:97) から、以上に述べた結論の一部に当たる箇所を次に引用する。

図4では、第1音節に立つ9母音それぞれに後続する第2音節の母音は、舌位置と開口度において内側に収斂した分布をしていることが見て取れる。この分布特徴を第1音節の短母音の位置と対照的に捉え、「中央化」と呼ぶことにする。「中央化」には、母音の開口度に応じた「狭→広」タイプと「広→狭」タイプの2種類がある。…中略…そして、さらに図3と図4を対比して見ると、第2音節の弱母音の「中央化」の程度より、語末の弱母音の方がより大きい度合いを示すことがわかる。

なお、上の引用部分では図に即した説明がなされているので、以下に同論文のpp.93-4.に掲載されている音響ダイアグラムを転載する。

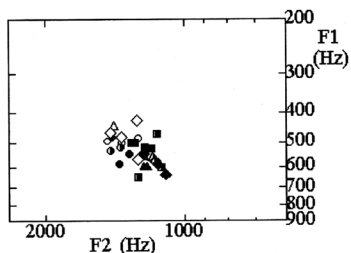


図3 全語彙における語末の各母音の音響ダイアグラム

△は [i] に、○は [e] に、◇は [u] に、●は [ɛ] に、□は [œ] に、▲は [ɪ] に、●は [a] に、■は [ɔ] に、◆は [o] に、それぞれ後続する語末の弱母音である。

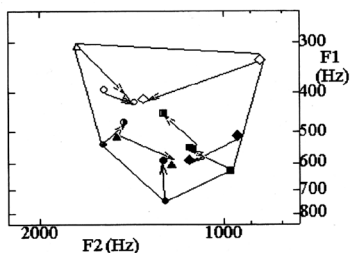


図4 第1音節の短母音に対する第2音節の短母音の「中央化」(矢印で示した)

3. 方法論

3.1. 実験装置および実験手順など

本稿における実験手順は、

- (1) 調査票の作成
- (2) 被験者の選別
- (3) 録音
- (4) 音編集

(5) 音響解析

(6) 解析結果の処理

という流れでおこなった。これらのうち、(1)と(2)に関しては次の3.3で述べる。また、(6)に関しては次節で述べるので、いずれもここでは触れない。

まず、(3)の録音は被験者の住んでいるところへ直接出向き、比較的静穏な環境を確保してからビデオカメラ(Canon IXY130(RE)、サンプリングレート:44.1KHz)で音声を収録した。ビデオで動画も収録する意義は、調音の特徴をも同時に記録できるからにほかならない。たとえば、[v]という単音は上歯と下唇で調音するのが一般的だが、逆にして下歯と上唇で調音しても音響的には変わらない。このような場合に同録された映像が威力を発揮することになる。次に(4)でこの音源をwave形式に変換し、単語ごとにカットしてそれぞれにファイル名をつけて保存した。なお、この段階で用いたソフトはCool edit 2000である。

最後に、(5)ではMulti speech 3700を用いて、主に母音のフォルマントを解析した。図3-1に、解析に用いたサンプル画像を示す。フォルマント解析は、Multi speech 3700に搭載されているLPCを用いて、基本的に第1フォルマント(F1)から第3フォルマント(F3)までおこなったが、結果としてF3にはほとんど目立った差異が現れなかったので、実質的にはF1とF2の2フォルマント間に見られる相対的關係に着目した。

モンゴル語スヌト方言に見られる弱化母音

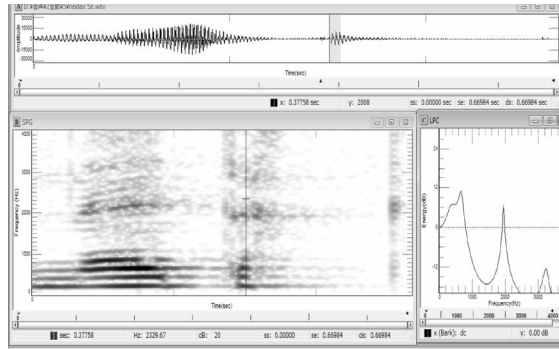


図3-1 解析見本

図の上段にはアナログによる原波形が表示されており、下段左にはデジタル処理されたspectrogram（以下SPG³と略）が、また右にはLPC（線形予測符号化）による解析結果が描かれている。

3.2. フィールドワーク

3.2.1. 被験者

本研究では、モンゴル語スヌト方言を母語とする話者3名を選び、あらかじめ用意した調査語彙表を読み上げてもらい、これを録音して分析資料とした。なお、スヌト方言話者3名の内訳は、高年層（50～60歳台）の女性（MCさん）1名、壮年層（30～40歳台）の女性（MGさん）1名、若年層（10～20歳台）の男性（Aさん）1名である。

3 これをソナグラムという場合もあるが、それはあくまでも略式の言い方であって、正式名称ではない。なぜなら、「ソナグラム」というのは初期に採択されていた商品名「ソナグラフ」で記録された図を意味していたからであり、あたかもバイクを「ホンダ」と呼ぶようなものである。なお、このソフトの供給元であるKAY社の呼び方も“sound spectrogram”であり、略号がSPGとなっている。

3.2.2. 調査語彙表

音響解析に用いた録音資料は、表3-2に示した22語である。語彙の選別に際しては、いずれも日常生活でよく使われているものであることと、モンゴル語スウト方言の母音音素をすべて網羅するものであることに留意した。また、定説では弱化母音は

(1) 短母音のみで構成されている語では、第2音節以下に

(2) 長母音、重母音を含む語では、それ以降に現れる短母音に

それぞれ生じるとされているので、本稿でもこれに従った分析を行った。なお、表中で下線を引いた部分が分析対象となっている弱化母音である。

次に、スウト方言の母音音素に関しては、吉池孝一・ハス(2008)のように、短母音音素に

陽性母音⁴ /a/, /ɛ/, /ɔ/, /œ/, /u/, /ɪ/

陰性母音⁵ /ɜ/, /θ/, /ʌ/, /i/

の、合計10種類を認める立場もあるが、本稿では /ɛ/ と /œ/ がいずれも第2音節に /i/ を有するという環境で逆行同化を受けた結果本来 [a] で実現されるべき /a/ が [ɛ] に近づき、[ɔ] で実現される /o/ が [œ] に近づいたものと解釈する。すなわち、[ɛ]、[œ] はいずれも [a]、[ɔ] と相補分布をなすことになるので、音素としてはハルハ方言などと同じに、男性母音に3種類の /a, u, o/, 女性母音に3種類の /e, u', o'/, 中

4 本稿では、日本の習慣に従って「陽性母音」を男性母音と呼ぶ。

5 脚注4と同様、本稿では女性母音と呼ぶ。

性母音に1種類の /i/ の、合計7種類を認めることとする。ただし、音声としては /i/ の直前に立つ /a/ は口蓋化して [ɛ] に近づく。同様に、/i/ の直前に立つ /o/ は口蓋化して [œ] に近づく。また、母音調和による制約のため、第2音節以下に現れる母音音素は本稿の音素表記によれば、表3-1のようになる。

なお、本稿では女性母音の /i/ と男性母音の /ɪ/ を区別せず一括して中性母音 /i/ として扱う。中性母音 /i/ は、いずれの母音音素とも共存するので、表中には記していない。また、to'rlxiitɛŋ のように非頭音節に中性の長母音が入ってくると、そこで調和はいったんブロックされて、あらたに女性の非円唇母音としてリセットされる。

表3-1 母音調和による制約

	第1音節	第2音節以下	属性
短母音	/a, u/	/a/	非円唇
	/e, u'/	/e/	非円唇
	/o/	/o/	円唇
	/o'/	/o'/	円唇
長・重母音	/aa, uu, ai, ui/	/a/	非円唇
	/ee, u'u', ei, u'i'/	/e/	非円唇
	/oo, oi/	/o/	円唇
	/o'o', o'i'/	/o'/	円唇

【音素表記について】

男性母音・非円唇：/a/ [a], /u/ [o]

男性母音・円唇：/o/ [ɔ]

女性母音・非円唇：/e/ [ɛ], /u' / [ɔ]

女性母音・円唇：/o' / [θ]

中性母音：/i/ [i] ~ [ɪ]

表3-2 分析資料

2音節語		3音節語	
単語	意味	単語	意味
baidagc'	戦士	bu'teesɛŋ	作った
gara	手	damz'uulax	渡す
naidax	頼む	ergeldɛŋ	飛び回る
nu'u'dleld	遊牧に	ezgu'irex	荒廢する
nu'u'stu'rgc'	二酸化炭素	ɛzniixɛŋ	主の
saaral	灰色の	nu'u'du'llu'ŋ	遊牧し(て)
u'u'rlex	巣を作る	su'seglex	信ずる
xedɛŋ	いくつかの	tanigdxad	わかるとき
mor'i	馬	to'rlxiitɛŋ	(xu'ŋ-)人間
		to'so'blo'x	計画する
		urams'xad	興奮することで
		xeregsɛl	道具
		zogcoolɛŋ	合わせる

4. 実験結果

4.1. 弱化母音のフォルマント

表3-3に、弱化の生じている部分(太字に下線を引いた部分)で計測したフォルマントの値を示す。

表3-3 弱化母音のフォルマント

		A_F1	A_F2	B_F1	B_F2	C_F1	C_F2
/a/	saar <u>a</u> l	848	1445	898	1512	881	1466
	gar <u>a</u>	832	1142	904	1224	882	1250
	naid <u>a</u> x	705	1859	659	1507	757	1533
	baild <u>a</u> gc'	667	1533	556	1546	684	1559
	tanigdx <u>a</u> d	1045	1521	850	1508	948	1440
/u/	damz'uul <u>a</u> x	916	1132	806	1133	860	1092
	urams'x <u>a</u> d	845	1526	855	1509	818	1421
/o/	mor' <u>i</u>	427	1064	372	973	358	1036
	zogcool <u>o</u> ng	653	1218	667	1304	524	1278
/e/	xed <u>e</u> ng	459	1611	465	1680	379	1568
	xeregs <u>e</u> l	457	1191	450	1257	572	1062
	ezgu'ir <u>e</u> x	443	1103	460	923	387	1002
	ergeld <u>e</u> ng	456	2003	451	1684	481	1589
	ezniix <u>e</u> ng	475	1789	457	2040	537	1614
/u'/	u'u'r <u>e</u> x	380	1505	445	1913	218	1984
	nu'u'stru' <u>u</u> gc'	494	1336	361	1903	411	1445
	nu'u'd <u>e</u> ld	343	1782	364	1639	381	1602
	bu'tees <u>e</u> ng	427	954	449	1310	350	1255
	nu'u'dell <u>e</u> ng	385	1553	439	1697	519	1252
	su'seg <u>l</u> ex	442	1589	450	1196	419	1223
/o'/	to'rlxiit <u>e</u> ng	453	1577	431	1612	458	1648
	to'so'blo' <u>o</u> x	464	1510	600	1342	578	1283

表中のA, B, Cはそれぞれ被験者のMCさん、MGさん、Aさんを示す。またF1は第1フォルマント、F2は第2フォルマントを意味する。多少の個人差はあるが、比較的3人の調音が安定していることが、次に示す図3-2からわかる。

この図を見て、まず気づくことはF1の値が開口度の広い/a/,/u/クラスとそれ以外とで2極化しているということである。このことは、調音面に置きかえると、弱化母音の開口度は/a/,/u/系では概して開かれるが、それ以外の母音では比較的同じ程度に閉じられているということにほかならない。

次に、F2の値は同一クラスの中でもかなり上下しており、不安定である。また、このデータを調音面に置きかえると、弱化母音の舌位置は概して前舌から中舌付近に集まっており、後舌は見られないということになる。

4.2. 強母音のフォルマント

前述した、4.1に示した弱化母音と対比することによってその特徴を明確にするために、弱化していない音節の母音（太字に下線を引いた部分）フォルマントを計測した結果を、表3-4に示す。

表3-4 強母音のフォルマント

		A_F1	A_F2	B_F1	B_F2	C_F1	C_F2
/a/	sa aral	1093	1563	1021	1571	1070	1524
	ga ra	1197	1635	1151	1666	910	1543
	na idax	820	2042	938	2072	945	2079
	ba ildagc'	786	1994	932	2062	845	1910
	ta nigdxad	1097	1608	925	1556	1185	1549
/u/	da mz'uulax	1128	1714	984	1479	1285	1507
	u rams'xad	544	1059	542	963	612	1058
/o/	mo r'i	649	1310	720	1085	591	1338
	zo gcoolong	615	1219	755	1213	653	1285
/e/	xe deng	386	1854	456	1822	339	1615
	xe regsel	400	1759	402	2043	393	1672
	ez gu'irex	384	1629	391	1824	378	1564
	er geldeng	420	2014	402	2147	453	1727
	ez niixeng	395	1719	553	1609	414	1676
/u' /	u' rlax	390	811	390	773	235	785
	nu' stru'gc'	370	783	415	973	364	926
	nu' dleld	304	812	255	851	352	882
	bu' teeseng	414	1063	556	1265	479	1027
	nu' delleng	401	747	428	673	351	818
	su' seglex	419	1295	591	1237	412	1117
/o' /	to' rlxiiteng	597	1211	458	1391	480	1175
	to' so'blo'x	592	1452	450	1151	433	1171

次に、これらの関係を弱化母音と比較しやすくするために図3-3にF1-F2図を示す。弱化母音とは異なり、音種別にそれぞれ固有の分布をしていることが見て取れる。

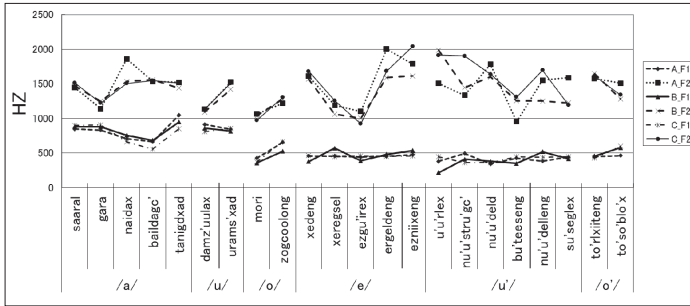


図3-2 弱化母音のF1-F2図

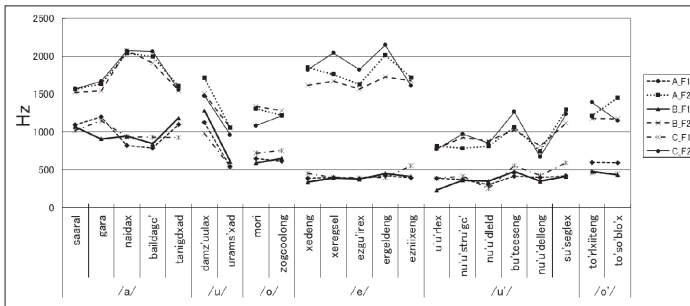


図3-3 強母音のF1-F2図

4.3. 弱化母音の特徴

以上で示した弱化母音の特徴を強母音と比較して音種別に見た結果、次のようなことが明らかとなった。

全体としては、図3-2と図3-3を比較すれば明らかだが、強母音

ではF1、F2ともに母音音素ごとに異なった分布を示している。いっぽう、弱化母音は4. 2に指摘したように/a/、/u/系とそれ以外という2極化した状況を示しており、音種ごとに異なる分布を示しているわけではない。また、詳細に見てみると、(1) 弱化母音には中央化が見られる、(2) 一部の語に従来説に対する反例が見つかった、の2点が本稿における研究成果である。

まず、中央化に関してだが、/a/で始まる/saara/、/gara/、/naidax/、/baidagc'/、/tanigdxad/、/damz'uulax/の6語のうち、3. 2. 2にも述べたように直後にある/i/の影響によって口蓋化を受けるために、naidax、baidagc'の2語ではF1が他の/a/系の語よりも低くなり、逆にF2が高くなる。IPAで表記すれば [ɛ] に近い音である。ただし、図3-2の弱化母音と比べると、特にこの2語だけに目立った違いは見られなかった。つまり、弱化母音はそれほど第1音節に立つ口蓋化した強母音の影響を受けないということである。

次に、強母音と比べると、/a/では総じてF1、F2とも弱化母音で数値が下降している。このことは、前舌広母音の/a/が、弱化することで開口度を下げ、舌位置を中舌方向に向かってやや後退させた結果であると解釈することができるので、これを一言でまとめれば、/a/の弱化母音には「中央化」が見られたということになる。

後舌半広母音の/o/の数値は、F1が弱化母音でやや低くなっているので、弱化に際して幾分開口度を下げたものと解釈できる。しかし、F2はほぼ変わらないので舌位置はあまり影響を受けないものと思われる。

半狭母音/e/、/u/、/o'/と狭母音/u'/のF1は強母音よりも若干弱母音の方が高い数値を示しているので、弱化に際して開口度の調節がゆるみ、幾分下顎を開いた調音になっている。いっぽう、弱化母音のF2は、後舌母音である/u/、/u'/も中舌母音である/o'/も大きく影響を受け、ほ

は前舌寄りの中舌母音である/e/と同じ数値を示している。このことは、やはり/a/と同様に中央化が起こった結果の所産であると考えられる。

以上をまとめると、スヌト方言にも弱化母音においてハルハ方言やオラダ方言と同様に中央化が見られる。しかし、後舌円唇母音/o/だけはほとんど中央化しないという点で、その内容が前二者とは少し異なる。

最後に、従来説では説明のつかない現象が見つかったので、報告しておく。これまでのモンゴル人学者による定説では、モンゴル語の弱化母音は第2音節以下の短母音に生じ、その度合いは多くの場合語末へ行けば行くほど顕著になると言われてきた。しかし、本稿におけるデータの中では、

/tanigdxad, urams'xad, zogcoolong, xedeng, xeregsel, ezniixeng/

の6語で、第2音節以下に弱化が見られない例が見つかった。すなわち、表3-3と3-4を比較すれば明らかだが、この6語に限って見れば、語頭の「強母音」と非頭の「弱化母音」とのフォルマント数値がほとんど同じになっているのである。ここでは分かりやすいように表3-5に示す。なお、太字は「強母音」、下線の部分は「弱化母音」を示す。たとえば、AのtanigdxadのF1の場合「**1097**」は「強母音**a**」の部分のフォルマントを示し、「1045」は「弱化母音**a**」の部分のフォルマントを示す。そこで、次節の考察のところでこの現象に対する筆者の考えを述べることにする。

表 3-5

	A_F1	A_F2	B_F1	B_F2	C_F1	C_F2
tanigdxad	1097	1608	1185	1549	925	1556
	<u>1045</u>	<u>1521</u>	<u>948</u>	<u>1440</u>	<u>850</u>	<u>1508</u>
urams'xad	544	1059	612	1058	542	963
	<u>845</u>	<u>1526</u>	<u>818</u>	<u>1421</u>	<u>855</u>	<u>1509</u>
zogcoolong	615	1219	653	1285	755	1213
	<u>653</u>	<u>1218</u>	<u>524</u>	<u>1278</u>	<u>667</u>	<u>1304</u>
xedeng	386	1854	339	1615	456	1822
	<u>459</u>	<u>1611</u>	<u>379</u>	<u>1568</u>	<u>465</u>	<u>1680</u>
xeregsel	400	1759	393	1672	402	2043
	<u>457</u>	<u>1191</u>	<u>572</u>	<u>1062</u>	<u>450</u>	<u>1257</u>
ezniixeng	395	1719	414	1676	553	1609
	<u>475</u>	<u>1789</u>	<u>537</u>	<u>1614</u>	<u>457</u>	<u>2040</u>

5. 考察

5.1. 従來說に対する反例

前節の末尾で述べたように、伝統的な説ではモンゴル語における弱化母音は、

- (1) 短母音のみに生じる
- (2) 語の第2音節以下の位置で生じる

とされていた。しかし、今回の実験結果から事実はそれほど単純ではなく、特に(2)に対する反例が数多く見つかったことは4.3にも述べたとおりであり、いずれも非頭位置の短母音であるにもかかわらず弱化が生じていない。

このことに関しては、城生佰太郎(2001:102-104)に重要な指摘があるので、以下に一部を引用する。

伝統的なモンゴル語学では、第1音節のことをこの位置に立つ母音が常にstressをになっているという点を根拠として「強音節」、一方第2音節以下を「弱音節」と呼んできた。先に掲げた表3-1における呼称は、いずれもこれを踏襲したものである。しかしながら、音声学的観察を深めて行くと、短母音だけで構成されている語においては単に「弱音節」として一括しただけでは済まされないような事実が見えてきた。このことを具体的に述べると、例えば先に挙げた

г ə р э л

м ə д э

の第2音節同士を比較すると、明らかにг ə р ə лの方がм ə д əよりも、(1) pitchが観察される、(2) 音価が幾分なりとも明瞭である、の2点で対立する。ここから、小論の筆者は同じ「弱音節」に属する母音でも、閉音節に立つ母音の方が開音節に立つ母音よりも相対的に音声学的なパワーが大きいことを根拠としてこれに「中強母音」という名称を付与し、その他の弱母音と区別することを提案する。

なお、この筆者による枠組みに従って全ての短母音を分類し直せば、次に示すような体系が得られる。

強母音 語頭音節の母音字。常に明瞭な音価を有し、stressをになう。但し、pitchに関しては後述する補註の通り弱音節の属性に依存する。

[+stress]

中強母音 非頭の閉音節に立つ母音字。音価はやや不明だが語末に最も近い位置では必ずpitchを伴う。但し、stressははならない。

[- stress
+ pitch]

弱母音 非頭の開音節に立つ母音字。音価は非常に不明瞭であり、
 [- stress] かつpitchもstressもになえない。
 [- pitch]

城生によるこの指摘をひとことでまとめれば、音節構造とアクセントが弱化母音の決め手になるということである。この点で、筆者の行った今回の実験結果も、弱化しなかった例はすべて非頭の閉音節に立つ母音であり、しかもpitchを伴っている为上の指摘に対して矛盾しない。すなわち、城生 佰太郎 (2001) の用語に従えばいずれも「中強母音」であるということになる。

5.2. 第1音節にかかる過重負荷

5.2.1. 母音調和

モンゴル系の諸語では、語の第1音節が担っている役割が極めて大きい。その第1の証拠が、母音調和の存在である。母音調和とは、

arab
 eemeg
 oosor
 xo'mso'g

などのように、同一単語内で第1音節に立つ母音が後続音節の母音を支配する音韻論的制約である。母音は、大きく

男性母音：/a, u, o/
 女性母音：/e, u', o'/

中性母音：/i/

にクラス分けされ、中性母音を除き同一単語内で男女の母音を混ぜて用いることはできない。つまり、この現象は語の第1音節がかなり強力な統辞機能をになっている、いわば「左へならえ！」という形で後続音節を統率しているということにほかならない。いかに第1音節の役割が重いかという証拠である。

5.2.2. アクセント

第2に、筆者が現在取り組んでいる問題であるが、伝統的にモンゴル語学ではモンゴル語のアクセントは常に語の第1音節に置かれる強さアクセントであるとされてきた。しかしながら、現在までのところ、そのように第1音節にアクセントが置かれる場合もあるが、むしろ第2音節に置かれる場合のほうが多く、しかもアクセントの類型を高さに注目することによって十分に整理することができるという見通しが立っている⁶。

そこで気になるのが、なぜこのような反例が多く挙げられているにもかかわらず、モンゴル語学では相変わらず第1音節stress説を掲げているのかということである。この理由を、筆者は次の2点に求めている。

第1は、モンゴル語のアクセントがいわゆる非示差的アクセントに属すということである。すなわち、モンゴル系諸語では、アクセントは語義の弁別に機能しない。アクセントを置く位置によって意味を異にする例がないのである。したがって、「音韻論的に無意味なアクセント」と呼ばれて、永らくこれを研究対象に据えようとする研究者がきわめて数少なかったのである。つまり、端的に言えば研究がほとんど行われて来

⁶ シリンゴワ (2015) を参照。なお、モンゴル語のアクセントを高さに注目して検討した先行研究に清水幹夫 (1975) がある。

なかったに等しいということで、ここに第1音節stress説が鵜呑みにされ、なかば定説化されてきた温床があったのではないと思われる。

しかしながら、言語事実としてのモンゴル語のアクセントは、上にも述べたように音声学的レベルから捉えると、弁別的機能は持たないが、だからといって決して人によって個々バラバラで収拾がつかないような無秩序な状況ではない。単語ごとに社会習慣的に一定したパターンがあり、緩やかではあるが全体をまとめている大枠は明瞭に存在する。ここに、「音声学的アクセント」の側面からの研究を行う価値と必要性がある。

第2は、本稿で扱った弱化母音の存在である。すなわち、モンゴル系諸語では語の第1音節に立つ母音だけが明瞭に調音されるが、第2音節以下ではその音価が曖昧化されるという傾向がある。そうして、この現象は短母音のみで構成されている単語で特に顕著に認められる。このことから、上述したように研究が行き届いていなかったアクセントの側面では、事象を単純化して「モンゴル語のアクセントは、常に語の第1音節に置かれる強さアクセントである」と定義されて今日に至ったものと考えられる。

5.2.3. 弱化母音

第1音節にかかる負荷の大きさを示す第3の要因が、本稿で扱ってきた弱化母音の存在である。すでに前節でも触れたように、伝統的な見方では、

モンゴル語の母音は、語の第1音節に立つ母音のみが明瞭に調音され、後続音節では弱化する。この傾向は、特に短母音のみで構成されている語において顕著である。

というものであった。ただし、弱化の実態は伝統的に叫ばれてきたほど単純ではなく、城生佰太郎（2001）が提唱しているように、条件によって強母音・中強母音・弱母音の3種類のパタンに分類される。それにもかかわらず、伝統的な見方が現在でも支配的なのは、すでに述べてきたように母音調和、アクセントと共に弱化母音にも「左へならえ！」式の、第1音節がすべての権限を握るとするきわめて統率力の強い原理原則を付与することによって、理論的にはすっきりとした説明が成り立つというメリットがあったためではないかと思われる。

5.3. 結論

モンゴル語スウト方言に関する弱化母音について、本稿の冒頭で述べた2つの目的に照らし、結論を述べれば次のようになる。

(1) 弱化母音の音声学的実態

- ①音節構造：開音節で弱化が顕著に見られる。
- ②生起する位置：非頭音節の短母音が原則だが、それにもかかわらず非頭音節の短母音が閉音節で、さらにピッチがかかると「中強母音」となり、弱化はおこなわれない。

(2) 弱化母音と第1音節stress説との関連性

母音調和、アクセントと共に弱化母音にも「左へならえ！」式の、第1音節がすべての権限を握るとするきわめて統率力の強い原理原則を付与することによって、理論的にはすっきりとした説明が成り立つというメリットがあったために、永らくこのような説明が有力視されてきたのではないかと考える。しかし、実際には第1音節stress説で説明できない例が数多く存在する。たとえば、ajag（碗）という語は第1音節が低くて弱いのに対し、第

2音節が高く強いのである。

【参考文献】

- 角道正佳（1974）「ハルハ方言の正書法」『日本モンゴル学会会報』 5
- 栗林均（1988）「モンゴル語における弱化母音の発達と閉音節化現象」
『音声の研究』 22、pp.209-223.日本音声学会
- 斉藤純男（1984）「現代モンゴル語の弱化母音と母音調和」『LEXICON』
第13号：57-71. 岩崎言語学研究会
- 斉藤純男（2012）『モンゴル語史研究入門（草稿2012年版）』、東京学芸
大学
- シリングワ（2015）「モンゴル語のアクセント—実験音声学的研究—」、
文教大学言語文化研究科2014年度修士論文
- 清水幹夫（1975）「現代モンゴル語におけるアクセントの実験音声学的
研究」、東京外国語大学外国語学部昭和45年度卒業論文
- 城生佰太郎（2001）『アルタイ語対照研究——なぞなぞに見られる韻律
節の構造——』、勉誠出版
- 城生佰太郎（2005）『モンゴル語母音調和の研究』、勉誠出版
- 城生佰太郎（2006）「実験音声学の研究方法」、城生佰太郎博士還暦記念
論集『実験音声学と一般言語学』：52-60.東京堂出版
- 吉池孝一・ハス（2008）「蘇尼特蒙古語方言初探：母音」、『KOTONOHA』
72号、pp.11-4. 古代文字資料館
- レントヤ（2006）「音響音声学によるモンゴル語弱母音の一考察——オ
ラダ方言における解析——」、城生佰太郎博士還暦記念論集『実
験音声学と一般言語学』：88-98. 東京堂出版